日経新聞　2019年2月27日

高祖父は「英学教育の祖」

◇伊藤博文らにも教えた学者　野辺地尚義の足跡たどる◇

野辺地　えりざ

江戸後期から明治にかけて活躍した野辺地尚義（1825～1909年）という岩手出身の蘭学者・英学者がいた。後に新政府の重鎮となる長州の井上馨や伊藤博文らに英語を教え、維新後は京都に日本初の公立女学校を創って「英学教育の祖」と呼ばれる。

その後は、現在東京タワーが建っている場所にあった会員制高級料亭「紅葉館」の館主を務め、外国の要人らをもてなし民間外交の立役者となった。紅葉館は43年、太平洋戦争で食材の調達が難しくなって閉鎖。東京大空襲で灰じんに帰し、58年に東京タワーが建った。

＆　＆　＆

男女相互の尊重を重視

幕末から明治期、多くの人々が新たな時代を創ろうと燃え、様々なネットワークが生まれた。尚義もその一人だったのだろう。調べるのにはとても時間がかかったが、東北人らしい実直で真摯、ひたむきな人物像が浮かび上がってきた。

尚義と周囲の人々を調べることで、私自身のファミリーヒストリーも明らかになっていった。それらを重ね「紅葉館館主　野辺地尚義の生涯」（桜出版）を昨年出版することができた。

尚義は、男女が互いを尊重する価値観を重視していたことがうかがえる。世界に通用する人材を育てようとし、若者には海外に雄飛してほしいと願っていた。あの時代の蘭学者、英学者、教育者たちの理想は今も生き続ける。（のべち・えりざ＝元幼児教育者）

私は尚義の孫の孫、つまり玄孫に当たり、高祖父の足跡を約30年にわたり、研究し掘り起こしてきた。

＆　＆　＆

明治人名辞典に記載

私は戦後間もない1947年、東京で生まれた。幼い頃は尚義の娘で、私の曽祖母の妹りあと同居していた。りあは1874年生まれで、父の勧めでロンドンに私費留学し、教育に生涯をささげた人だった。りあからは「尚義を『なおよし』と読んではダメなのよ」などと折に触れ聞かされ、先祖に偉い人がいたらしいと知っていた。

紅葉館では教養豊かで、英語が堪能な女性がたくさん働いていた

子育てが一区切りした40代の頃、近くの図書館で何気なく「明治人名辞典」をめくっていると、高祖父の名を見つける。15行ほどの短い文章をコピーして持ち帰ったが、人物像などを知らないことに改めて気づいた。

親戚に尋ねると、古い写真が残っているという。見せてもらっても、どこで誰と撮影したのかさっぱり分からない。図書館を巡っては資料を集め、ゆかりの地に足を運んで少しずつ手がかりをつかんでいった。

＆　＆　＆

初の公立女学校を創立

尚義は現在の岩手県花巻市の亀ケ森で下級武士の野辺地家に生まれた。父は豪農の家から養子に入ったので、身分は低くても生活は豊かだったようだ。南部藩に出仕し、ペリー来航で世間が騒然とする中、32歳で脱藩して江戸に出た。

まず蘭学を学ぼうと、長州出身の大村益次郎が開いた私塾、鳩居堂に入る。目を悪くして夜中の書見を禁じられたというエピソードが残るほど寸暇を惜しんで勉強した。そして長崎に赴き、2年で英学を修めた。尚義は益次郎から厚く信頼されていたようだ。長州藩の講習所に招かれ、英国に密留学することになる井上、伊藤ら長州ファイブにも英語を教えたのだ。

実は私も1990年代、夫の転勤に伴いアムステルダムで暮らし、オランダ語に挑戦したことがある。尚義の時代は辞書も限られ、語学習得の苦労がしのばれる。

尚義は維新後、京都府の官吏になり、英学校、フランス学校などの監督を任される。そして1872年に日本初の公立女学校「新英学校及び女紅場」を創立した。維新の活気みなぎる時代、向学心に燃えた女性が集まったようだ。英語だけでなく、書道や茶道、華道、洋服の仕立てや養蚕まで教えた。視察した福沢諭吉が品位の高さに感動したと書き残している。

学校運営が軌道に乗った79年、東京の財界では外国の賓客をもてなす社交場の構想が持ち上がっていた。東京・芝公園に広大な庭園を設けた和風建築の「紅葉館」を造ろうというのだ。その一切を取り仕切る責任者として尚義が招かれた。

紅葉館は81年に開業。83年にできた鹿鳴館とともに活用され、外国人には「メイプル・クラブ」として愛された。調度品なども豪華で、「盃を持ち帰る客が後を絶たず」という見出しの新聞記事が載ったほどだ。

尚義は1909年に亡くなるまで館主を務め